●第2回「私と新聞」親子作文コンクール●

入賞作品紹介⑥

【中学生「親の部」優秀賞】

「親子の絆と新聞」

郡山市　阿部（あべ）　美代子（みよこ）さん　40

中学生の息子は反抗期真っ只中。同性であるが故なのか、父親に対して思いの丈を全力でぶつける。「無視されるより幸せだな」。寛大な父親の心など、今の息子には届かない。

そんな息子が作文コンクールで最高賞を頂いた。翌日の新聞に顔写真と名前が掲載され、心からの笑顔の息子を久方ぶりに見ることができた。そして父親は、親バカとはこのことかと思うほど新聞を買いしめた。

「マジかよお」の息子の照れ笑いに込められた父親への思い。新聞がきっかけで再確認できた親子の絆。温かい空気が二人を包み、とても幸せな時間。そして父親はこう続けた。

「善いことをしても悪いことをしても新聞に名前が載るけれど、どうせなら善いことをして載りたいよなあ」。

今日の父親のひとことは、真っすぐに息子の心に届いたに違いない。

ささめ雪の舞う真冬でも、積み上げられた新聞の山を見るたびに、この日の出来事を思い出し、気持ちは春らんまんの母なのでした。

【中学生「親の部」優秀賞】

「私と新聞」

会津若松市　渡部（わたなべ）　靖子（やすこ）さん　48

二〇一一年七月、新潟・福島豪雨がありました。只見町の実家の母から、これから避難すると電話があってから丸三日間まったく連絡が取れずに不安な日を過ごしました。テレビでも、情報が出てこないなか、朝来る新聞がどんなに待ち遠しかったか。あんなに朝早くから新聞を読んだことはありませんでした。

見慣れた景色や同級生の家が流木や土砂で埋めつくされ、想像を絶する惨状となっている写真が載っていました。直接実家の集落の被害状況がわかった訳ではありませんでしたが、とりあえず実家の周辺は大丈夫なのだと安心しました。

新聞は通信手段がないときには一番朝早い情報源になるんだと思いました。新聞を作ってくれる人、配達してくれる人に感謝し、新聞を読めるということにも幸福を感じた時でした。二〇一二年はいいニュースがいっぱいの新聞になってほしいです。

＝おわり＝